

ジョン万次郎の生涯

生い立ち、漂流と渡米

万次郎（旧字体：萬次郎）は、文政10年1月1日（1827年1月27日）、土佐国幡多郡中ノ浜村。現在の高知県土佐清水市中浜で、半農半漁で暮らす貧しい漁師の家の次男として生まれた。

万次郎が9歳のとき父が亡くなり、また母と兄が病弱であったため、幼い頃から働いて家族を養った。寺子屋に通う余裕がなかったため、読み書きもほとんど出来なかった。

天保12年1月5日（1841年1月27日）早朝の宇佐浦（現・土佐市宇佐町）、14歳になっていた万次郎は、足摺岬沖での鰺鮪漁に出航する漁船に炊事と雑事を行う係として仲間4名と共に乗り込んだ。ところが、万次郎達は足摺岬の南東15キロメートルほどの沖合で操業中、突然の強風に船ごと吹き流され、航行不能となって遭難してしまう。5日半を漂流した後、伊豆諸島にある無人島「鳥島」に漂着し、この島でわずかな溜水と海藻や海鳥を口にしながら143日間を生き延びた。

同年5月9日（1841年6月27日）、万次郎達は、アメリカ合衆国の捕鯨船ジョン・ハウランド号が島に立ち寄った際、乗組員によって発見され、救助された。しかし、その頃の日本は鎖国していたため、この時点で故郷へ生還する術は無く、帰国の途に就いた捕鯨船に同乗したままアメリカへ向かわざるを得なかった。翌年、ハワイのホノルルに寄港した折、救助された5名のうち万次郎を除く4名はこの地で船を降り、ひとり万次郎は捕鯨船員となって船に乗り続け、アメリカ本土を目指すことになった。船長のホイットフィールドに頭の良さを気に入られたこともあるが、何より本人が希望した処遇であった。

航海中の万次郎は、生まれて初めて世界地図を目にし、世界における日本の小ささに驚いている。また、航海中、アメリカ人の乗組員からは、船名にちなんで「ジョン・マン(John Mung)」の愛称で呼ばれた。同年、ジョン・ハウランド号は捕鯨航海を終え、ホイットフィールド船長の故郷であるマサチューセッツ州ニューベッドフォードのフェアヘブンに帰港した。アメリカ本土に渡った万次郎は、船長の養子となって一緒に暮らすことになる。1843年にはオックスフォード学校、1844年にはバーレット・アカデミーで英語・数学・測量・航海術・造船技術などを学ぶ。彼は寝る間を惜しんで熱心に勉強し、首席となった。民主主義や男女平等など、日本人にとって新鮮な概念に触れる一方で、人種差別も経験した。



萬次郎と仲間達の群像／ジョン万次郎資料館がある施設「海の駅あしずり」(土佐清水市養老303)の駐車場に建立されている記念碑

捕鯨生活と帰国

学校を卒業後は捕鯨船に乗る道を選び、数年間は近代捕鯨の捕鯨船員として生活していた。



1850年5月、日本に帰る事を決意、帰国の資金を得るため、ゴールドラッシュに沸くサンフランシスコへ渡り、サクラメント川を蒸気船で遡上し、鉄道で山へ向かった。数ヶ月間、金鉱にて金を採掘する職に就き、そこで得た\$600の資金を持ってホノルルに渡り、日本へ向け出航した。

1851年2月2日、海外から鎖国の日本へ帰国した万次郎達は、薩摩藩の取調べを受ける。薩摩藩では中浜一行を厚遇し、開明家で西洋文物に興味のあった藩主・島津斉彬は自ら万次郎に海外の情勢や文化等について質問した。斉彬の命により、藩士や船大工らに洋式の造船術や

航海術について教示、その後、薩摩藩はその情報を元に和洋折衷船の越通船を建造した。斉彬は万次郎の英語・造船知識に注目し、後に薩摩藩の洋学校（開成所）の英語講師として招いている。

薩摩藩での取調べの後、万次郎らは長崎に送られ、江戸幕府の長崎奉行所等で長期間尋問を受ける。長崎奉行所で踏み絵によりキリスト教徒でないことを証明させられ、外国から持ち帰った文物を没収された後、土佐藩から迎えに来た役人に引き取られ、土佐に向った。高知城下において吉田東洋らにより藩の取り調べを受け約2ヶ月後、帰郷が許され、帰国から約1年半後の嘉永5年（1852年）、漂流から11年目にして故郷に帰る事が出来た。

帰国後の活躍

帰郷後すぐに、万次郎は土佐藩の士分に取り立てられ、藩校「教授館」の教授に任命された。この際、後藤象二郎、岩崎弥太郎などを教えている。

1853年、黒船来航への対応を迫られた幕府はアメリカの知識を必要としていたことから、万次郎は幕府に招聘され江戸へ行き、直参の旗本の身分を与えられた。その際、生まれ故郷の地名を取って「中濱」の苗字が授けられた。万次郎は軍艦教授所教授に任命され、造船の指揮、測量術、航海術の指導に当たり、同時に、英会話書の執筆、翻訳、講演、通訳、英語の教授、船の買付など精力的に働く。

その後、結婚。藩校「教授館」の教授に任命されるが、役職を離れた。理由の1つには、中浜がアメリカ人と交友することをいぶかしがる者が多かったことも挙げられる。また当時、英語をまともに話せるのは中浜万次郎1人だったため、マシュー・ペリーとの交渉の通訳に適任とされたが、

通訳の立場を失うことを恐れた老中がスパイ疑惑を持ち出したため、結局ペリーの通訳の役目から下ろされてしまったが、実際には日米和親条約の平和的締結に向け、陰ながら助言や進言し尽力した。

1860年、日米修好通商条約の批准書を交換するための遣米使節団の1人として、咸臨丸に乗りアメリカに渡る。船長の勝海舟が船酔いがひどくまともな指揮を執れなかったため、万次郎は代わって船内の秩序保持に努めた。サンフランシスコに到着後、使節の通訳として活躍。帰国時に同行の福澤諭吉と共にウェブスターの英語辞書を購入し持ち帰る。

慶応2年（1866年）、土佐藩の開成館設立にあたり、教授となって英語、航海術、測量術などを教える。翌年、薩摩藩の招きを受け鹿児島に赴き、航海術や英語を教授したが、同年12月、武力倒幕の機運が高まる中、江戸に戻った。

明 治維新後の明治2年（1869年）、明治政府により開成学校（現・東京大学）の英語教授に任命される。普仏戦争視察団として欧州へ派遣されるが、発病のため戦場には赴けずロンドンで待機した。帰国の途上、アメリカで恩人のホイットフィールドと再会。更に帰国途上にハワイにも立ち寄り、旧知の人々と再会を果たした。帰国後に軽い脳溢血を起こし、数ヵ月後には日常生活に不自由しないほどに回復するが、以後は静かに暮らす。

時の政治家たちとも親交を深め、政治家になるよう誘われたが、教育者としての道を選んだ。

明治31年（1898年）、72歳で死去。

万次郎が日本人初とされるもの

- ◆ 『ABCの歌』を日本に初めて紹介した。
- ◆ 日本で初めてネクタイをしたとも言われる。
- ◆ 初めて鉄道・蒸気船に乗った日本人でもある。
- ◆ 日本人で初めて近代式捕鯨に携わった。
- ◆ 日本人で初めてアメリカのゴールドラッシュといわれる金の採掘に携わった。



ジョン万次郎資料館

〒787-0337 高知県土佐清水市養老 303

電話：0880-82-3155

FAX：0880-82-3156

